

---

# 共同研究の経過と概要

---

山田康弘

## I 研究の目的

日本列島における昨今の先史時代研究を概観してみると、そこで語られる時代像（特に縄文時代像）は、研究者間で大きく異なっている。その理由の1つとして、1980年代以降の膨大な発掘調査資料の蓄積に加え、各地における地域研究が進展した結果、個々の地域における社会や文化の独自性・特殊性に焦点をあてる機会が多くなり、各地域を自律的な空間として捉えるようになったことが挙げられる。また、約13,000年間の時間幅を含む縄文時代の社会や文化の時期的な違いが明瞭になり、どの時期のどの地域の特徴を「縄文的」として捉えるかで、時代像が大きく異なることも関係している。縄文時代・縄文文化という統一的な枠組みを所与のものともみならず視点に対して、再検討を促す研究動向と連動して、一部の研究者の中からは、縄文文化というまとまりがあるという構図そのものが虚構であり、その本質は多様な文化の集合体であるといった意見も出されるようになってきた。このような状況は、従来私たちが縄文時代・縄文文化と一括してきた枠組みとその内容に対して、時期性・多様性・地域性という観点から再検討を要請していると言ってよいだろう。

理由の2つめとして、80年代までに構築されてきた縄文社会論・集団論が、新しい視点や方法論の導入によって再検討されるようになり、各研究者がその結果を肯定的に見るか否かによって、個々にイメージされる社会像が大きく異なっている点を挙げることができる。具体的には、90年代以降における形質人類学的手法および民族学的視点の導入などをきっかけとする縄文集団論の再検討、社会成層化・複雑化の議論がこれにあたる。80年代に形成された縄文時代観、すなわち縄文時代の社会が、「身内」「他所者」という2つ区分からなる比較的単純な集団構造を持ち、成層化の傾向が見られない等質的なものであったとする従来の縄文社会像は、近年の研究成果によって様々な修正を余儀なくされており、場合によっては大きな変更を迫られる可能性がある。

地域多様化および社会複雑化という視座は、現在の縄文時代研究、ひいては人類学的な先史時代研究には欠くことのできないもののはずであるが、社会構造や地域性に関する既存の研究において、両者が列島規模（この領域設定方法に一国史的歴史観が内在されているとしても）で総合的に検討されたことはほとんどない。これは、そのような視座を現在の研究者たちが持ちえなかったということではなく、より細分化への傾向を強めていく昨今の考古学研究の動向からすれば、個々の研究者のキャパシティを大きく超えるからでもあろう。今回の共同研究においては、まずこのような大規模な議論の場を形成することを最初の目的とし、各共同研究員が多様な見解を出し合い議論を交えながら、意見の統合が可能かどうか、可能であればどのような形で意見を調整・統合し、時代像

---

を再構築できるか見極め、その結果を展示に結びつけたいと思う。

また、先史時代社会の地域多様化・社会複雑化というプロセスについては、時空間を超えて、人類史的な課題として取り組むべき課題でもある。ここに組織立てて共同研究を行い、従来の時代像を再検討し、生業形態（含む環境史的視点、自然資源利用技術等）・居住形態・集団構造・精神文化などといった様々な要素を複合的に検討していくことによって、特に社会構造と地域性に重心を置きながら「新たな先史時代像」を模索する意義がある。

## II 共同研究員の分担

共同研究員とテーマとの関係、役割分担は、当初以下の通りであった。

- 1 縄文時代・文化の時空間的枠組みを再構築するために、日本列島の北方、及び南方、さらに環境史的観点からの検討（福田正宏、伊藤慎二、工藤雄一郎）
- 2 各地における縄文文化の様相の検討（北海道地方：高瀬克範、東北地方：菅野智則、関東地方：谷口康浩・阿部芳郎、中部地方：設楽博己、東海地方：長田友也、近畿地方：瀬口真司、中国地方：富井 眞、九州地方・朝鮮半島：小畑弘己）
- 3 縄文文化の植生史的観点からの検討（佐々木由香）
- 4 縄文文化における階層化社会存在の可能性についての検討（高橋龍三郎）
- 5 縄文人の起源に関する検討（松村博文）
- 6 縄文人における時期的・地域的差異についての検討（近藤 修）
- 7 縄文人における食性の地域的時期的検討（米田 穰）
- 8 縄文人における身体変工（抜歯）習俗に関する検討（舟橋京子）
- 9 縄文時代の社会をどのように捉えるか、時代論・文化論的観点からの検討（谷口康浩・阿部芳郎・高橋龍三郎・設楽博己・山田康弘）
- 10 全体的な統括（山田康弘）

## III 研究の経過

3年間にわたる研究の経過、および研究成果を以下に記す。

### 第1年目（平成24年度）

#### 研究会

24年度は3回の研究会を開催した。うち2回を歴博で行い、1回を沖縄県立博物館・美術館および遺跡現地踏査・資料実見のエクスカージョンとした。

第1回共同研究会 5月19日（土）・20日（日） 於国立歴史民俗博物館

山田康弘「本共同研究の趣旨説明」

山田康弘「愛知県保美貝塚の発掘調査」

長田友也「東海地方における縄文晩期社会」

山田康弘「第1展示室リニューアルについての説明」

---

第1展示室の展示見学・展示批評・意見交換

第2回共同研究会 10月27日(土)・28日(日) 於国立歴史民俗博物館

工藤雄一郎「土器出現の年代と古環境」

福田正宏「サハリンの新石器土器と北辺の縄文土器」

菅野智則「東北地方の縄文集落」

山田康弘「第1展示室リニューアルにあたって」

第3回共同研究会 1月26日(土)・28日(月) 於沖縄県立博物館・美術館

山田康弘「本共同研究の概要と意義」

山田康弘「本共同研究における研究方針の一部変更とその理由」

山崎真治「中琉球・南琉球の先土器—土器出現期について」(ゲストスピーカー)

伊藤慎二「沖縄諸島における縄文土器の様相」(ゲストスピーカー)

総合討議「縄文文化の枠組みについて」

遺跡踏査・資料実見(八重瀬町歴史民俗資料館見学→港川フィッシャー見学→ガンガラーの谷・サキタリ洞・武芸洞→北谷町資料室→うるま市伊波貝塚→北中城村荻堂貝塚→読谷村歴史民俗資料館)

## 1年目の研究成果

共同研究初年度の第1の課題は、いわゆる「縄文時代・文化」(以下、縄文時代とする)における時間的・空間的範囲の検討と、縄文時代各地における「集落」が時期ごとにどのような変遷をし、生業形態(環境史・自然資源利用技術)との関わりの中で、その景観・空間利用のあり方がどのように変わっていくのかをトレースし、その展開が地域ごとにどのように多様化していったのか把握することであった。これについては工藤雄一郎「土器出現の年代と古環境」、福田正宏「サハリンの新石器土器と北辺の縄文土器」、伊藤慎二「沖縄諸島における縄文土器の様相」、また研究代表者が副代表を務めた展示プロジェクト「弥生ってなに?!」と連動した研究により、縄文時代がいわゆる草創期開始期(16,500年前)からスタートし、その終末は突帯文土器の頃としてもかなり地方によって複雑な様相があるということで、コンセンサスを得ることができた。また、縄文文化の空間的範囲は、基本的に日本列島の範囲と一致し、サハリンまでは主体的な分布をしないこと、沖縄諸島に関しては、前期・後期は九州における縄文文化(土器)と系譜的に連動するが、それ以外の時期では独自性が強く、「沖縄(琉球)縄文文化」と呼ぶべきものであるといった議論を行うことができた。

この他、各地の集落の様相についても、長田友也「東海地方における縄文晩期社会」、菅野智則「東北地方の縄文集落」、山崎真治(ゲストスピーカー)「中琉球・南琉球の先土器—土器出現期について」、山田康弘「愛知県保美貝塚の発掘調査」などといった研究発表、およびそれに伴う総合討議によって、東海・東北・九州南部～沖縄地域にかけて、ある程度明確にすることができた。

さらに、考古学・人類学・古環境の3分野が共同して研究を行うことができる新しい資料の入手をはかるために、平成25年2月27日から3月22日にかけて、科学研究費補助金(基盤研究(B))

---

「愛知県保美貝塚出土資料による考古学・人類学のコラボレーションモデルの構築と展開」と連動しながら愛知県保美貝塚の発掘調査を行った。これにより、共同研究用の新規の資料を入手することができた。

## 第2年目（平成25年度）

### 研究会

25年度は3回の研究会を開催した。うち2回を歴博で行い、1回を種子島における遺跡現地踏査・資料実見のエクスカージョンとした。

第1回共同研究会 6月29日（土）・30日（日） 於国立歴史民俗博物館

- 小畑弘己「圧痕法の最近の成果—韓国新石器時代の穀物栽培と縄文文化—」
- 阿部芳郎「環状盛土遺構と後晩期の地域社会—千葉県印旛沼南岸地域の事例より」
- 山田康弘「愛知県保美貝塚における盤状集骨の調査」
- 高瀬克範「北海道キウス4遺跡と縄文後晩期集落・墓地研究」
- 米田 穰「同位体からみた縄文時代の食生態」
- 山田康弘「第1展示室リニューアルにむけての説明」

第2回共同研究会 11月30日（土）・1日（日） 於国立歴史民俗博物館

- 高橋龍三郎「縄文時代のトーテミズムの可能性を探る」
- 瀬口眞司「琵琶湖周辺における定住集落の成立と展開」
- 舟橋京子「抜歯風習からみた縄文社会」
- 富井 眞「遺跡群研究の論理・土器黒化部の向き」
- 山田康弘「第1展示室（縄文）の展示構想について」

第3回共同研究会 3月8日（土）～10日（月） 於種子島総合開発センター・南種子町役場・中種町歴史民俗資料館

- 山田康弘「縄文文化の範囲—タテとヨコの議論—」
- 総合討議「縄文文化の枠組みと地域社会のあり方について」
- 遺跡踏査・資料実見（奥ノ仁田遺跡→鬼ヶ野遺跡→立切遺跡→広田遺跡）

### 2年目の研究成果

次年度の課題は、前年度に引き続き、各地における集落の様相を明らかにするとともに、「集落」と「墓域」の分析双方から析出される集団像について、時期的・地域的な差異の有無を明らかにし、差異があるとするならばそれはどのような内容をもったものであったのかといった諸点に検討を加え、それが従来の縄文時代像（例えば80年代に構築された時代像）とどのように異なるのか検討を加えることであった。これについては、阿部芳郎「環状盛土遺構と後晩期の地域社会—印旛沼南岸地域の事例」、高瀬克範「北海道キウス4遺跡と縄文後晩期集落・墓地研究」、瀬口眞司「琵琶湖周辺に

---

における定住生活の成立と展開」, 山田康弘「愛知県保美貝塚における盤状集骨の調査」といった地域的な事例研究とともに, 高橋龍三郎「縄文時代のトーテミズムの可能性を探る」, 舟橋京子「抜歯風習からみた縄文社会」, 富井眞「遺跡群研究の論理」といった全国的に俯瞰する研究によって, 各地の集落・墓制のあり方, さらにはその背後に想定される社会について理解を深めることができた。加えて, 人類学的な見地から米田穰が「同位体からみた縄文時代の食生態」を発表し, その食性の多様性を指摘した。平成 25 年度の成果の中で, 特に重要であるのは, 縄文時代・文化における内容が, 時期・地域によって非常に多様な姿をしており, その差異は個々の共同研究者の想定を超えるものがあったということである。これにより, 各地域における社会および全国的に俯瞰する観点からの社会という 2 種類の社会像を描くことができ, 来年度に予定している議論の収束に向けての準備が整った。

### 第 3 年目 (平成 26 年度)

#### 研究会

2 回の研究会を, いずれも歴博で行った。

第 1 回共同研究会 7 月 5 日 (土)・6 日 (日) 於国立歴史民俗博物館

谷口康浩「環状集落の分節構造と社会組織」

設楽博己「土製耳飾りと縄文社会」

山田康弘「岩手県二戸市中穴牛遺跡から検出された遠賀川系土器使用の土器棺墓について」

山田康弘「第 1 展示室リニューアルにむけての説明」

第 2 回共同研究会 12 月 20 日 (土)・21 日 (日) 於国立歴史民俗博物館

山田昌久「縄文時代の木材利用」(ゲストスピーカー)

近藤 修「人骨から見た縄文時代の地域性」

山田康弘「保美貝塚 2014 年度の発掘調査」

総合討議「先史社会の複雑化と地域性」

#### 3 年目の研究成果

最終年度の研究課題は 2 つあった。1 つは, 先史時代の社会がどのように複雑化していったのか, 生業形態・精神文化からの検討という視点を含めながら考察を加え, 新しい先史時代像を提示することであり, 結果として先史時代社会の多様化・複雑化のあり方を検討することによって「時代概念」そのものを再考することも視野に入れていた。もう 1 つの課題は, 地域多様化・社会複雑化というプロセスが, 異なる視点 (たとえば人類史的観点, 一国史的な歴史観や, 旧石器時代や弥生時代など他の時代との比較) から見た場合, どのように進行していったのか, どのように位置付けられるのか, その見通しを得ることであった。

最終年度には, 縄文時代の社会について, 縄文文化におけるタテ・ヨコの範囲の検討を踏まえたうえで, 集落・墓地の検討に引き続いて, 縄文時代の社会のあり方について議論を行なった。集落と

墓地、社会構造の関係については、谷口康浩が「環状集落の分節構造と社会組織」を発表し、縄文社会の複雑性について改めて問題を提起し、設楽博己も「土製耳飾りと縄文社会」で墓地のあり方と装身具のあり方から社会構造に接近を試み、一般に普及しているような、単純な平等社会という概念では縄文社会を捉えることができないことを示した。また、山田康弘は縄文文化の終末について「岩手県二戸市中穴牛遺跡から検出された遠賀川系土器使用の土器棺墓について」で検討し、弥生時代中期併行期にまで、縄文的様相が残存する一方で、変容もしていることを示した。さらに形質人類学の立場から近藤修が縄文人の多様性について「人骨からみた縄文時代の地域性」として発表し、全国同一形質で捉えられることの多い縄文人には、細かな地域的多様性のあることが示された。

### 3 年間における研究成果

これらの研究成果と前年度までの研究成果を統合し、先史時代の社会がどのように複雑化していったのか、生業形態・精神文化からの検討という視点を含めながら考察を加え、共同研究の参加者がコンセンサスを得ることのできるような新しい先史時代像を描くことに努めた。しかしながら、社会複雑化というプロセスが地域によって多様化していること、また道具立てなどのハードな部分に対する技術など、ソフトの部分による対応が、やはり地域によって多様化していること（山田昌久発表：ゲストスピーカー）などから、全国一律に議論することは難しいという結論に達した。一方で、これにより先史社会の複雑化・地域多様化がどのように進行していったのか、どのように位置付けられるのか、逆説的ではあるが、「統一的、かつ単純に把握することは難しい」という見通しを得ることができた。結果として、先史時代社会の多様化・複雑化のあり方を検討することによって「時代概念」そのものを再考し、「縄文時代＝一つ文化」という既成の見方が、その視点の位置によって変わりうるという点では、意見を収束させることができた。また、これらの様々な議論を踏まえながら、同時並行している第1展示室リニューアルについても、おおよその形をまとめ、細部において意見の相違は残ったものの、大筋でコンセンサスを得ることができ、大きな成果を得ることができた。

これらの研究成果については2015年12月6日に開催された第99回歴博フォーラム「縄文時代・文化・社会をどのように捉えるか？」において、発表を行っている。なおその発表内容については、吉川弘文館より『縄文時代：その枠組・文化・社会をどう捉えるか』として書籍化され、2017年2月24日に刊行されている。

## IV 研究組織

[共同研究員] (◎は研究代表者、○は研究副代表者、所属等は発足時)

設楽 博己	東京大学大学院人文社会系研究科・教授
高橋龍三郎	早稲田大学文学学術院・教授
阿部 芳郎	明治大学文学部・教授
谷口 康浩	國學院大學文学部・教授
瀬口 眞司	(財)滋賀県文化財保護協会・主任
佐々木由香	(株)パレオ・ラボ・統括部長
高瀬 克範	北海道大学大学院文学研究科・准教授

---

松村 博文	札幌医科大学医学部・准教授
近藤 修	東京大学大学院理学系研究科・准教授
米田 穰	東京大学総合研究博物館・教授
舟橋 京子	九州大学総合研究博物館・助教
長田 友也	中部大学人文学部・非常勤講師
富井 眞	京都大学文化財総合研究センター・助教
小畑 弘己	熊本大学文学部・教授
福田 正宏	東京大学大学院創成科学研究科・准教授
菅野 智則	東北大学埋蔵文化財センター・専門職員
伊藤 慎二	西南学院大学文学部・准教授（平成 25 年度より）
○工藤雄一郎	本館研究部・助教
◎山田 康弘	本館研究部・准教授

[ゲストスピーカー]

山田 昌久	首都大学東京都市教養学部・教授
山崎 真治	沖縄県立博物館・美術館・学芸員

(国立歴史民俗博物館研究部)